

ふちゅうのまちの幸福論

要旨

1 開催概要

日時：平成26年6月25日（水）午後7時～午後8時30分

場所：府中グリーンプラザ けやきホール

主催：府中市、特定非営利活動法人府中市民活動支援センター

プログラム：

(1)開会・主催者あいさつ 高野 律雄（府中市長）

(2)基調講演「人と人がつながるまちづくり～コミュニティ・デザインとは～」
山崎 亮 氏(株式会社 studio-L 代表)

(3)トークセッション 市長と山崎亮が語る「ふちゅうのまちの幸福論」
コーディネーター 林 丈雄 氏
(特定非営利活動法人グラウンドワーク三島)

(4)閉会・終わりのあいさつ

2 基調講演

- ◆ 「人と人がつながるまちづくり～コミュニティ・デザインとは～」
山崎 亮 氏（株式会社 studio-L 代表）

3 トークセッション要旨

市長と山崎亮が語る「ふちゅうのまちの幸福論」

コーディネーター 林 丈雄 氏
(特定非営利活動法人グラウンドワーク三島)

・はじめに

(林)本日、第1部では、山崎さんに「人と人がつながるまちづくり」をテーマにご講演いただきましたが、第2部では山崎さんと高野市長に、「ふちゅうのまちの幸福論」をテーマとして、トークセッションしていただきます。また、事前にいただいたご質問にも適宜お答えいただきながら、進めさせていただきます。

・府中市について

(林)山崎さん、今まで府中市に来たことはありますか？

(山崎)初めてです。

(林)会場にいらしている、府中市民の空気はいかがですか？

(山崎)あったかいですよ、笑ってくれるし。日本全国、地域によって空気が違

いますが、今日はすごく話しやすかったです。

(林)これに対して、高野市長いかがですか？

(市長)舞台から見ていて、本日は笑顔の方が多かったです。しかし、決してまじめでないわけではなく、みなさん真剣にまちづくりに対してご意見をもってくださいありがとうございますので、感謝しております。

(林)高野市長より、府中市のPRを、この場のみなさんをお願いいたします。

(市長)府中はどんなまちと聞かれたら、「歴史と文化のまち」と答えます。大化の改新前後から人が住み着いて、武蔵国の国府でもありました。また、残されている自然が豊かで緑が多い、これが府中のまちの魅力だと思います。

(林)山崎さん、今の話を踏まえていかがですか？

(山崎)大化の改新前後からと聞いて驚きました。歴史のあるまちではうまく協働をしていかなければならない側面がありますし、一方で、歴史はお金では買えないため、これを市民の方がもう一度見直す、再発見する、自覚することが必要です。歴史や文化のないまちにとって、のどから手が出るほど欲しい財産だと思います。

・ これからの協働について

(林)このような環境の中で、高野市長、これからどのように協働に取り組んでいきますか？

(市長)府中市の人口は約25万人で、昼間、学校や働きに府中市に来る人が6万人以上います。これらすべてを府中市民と考え、手を取り合っていけないか考えるのが協働の第一歩だと思います。多摩地域の中では高齢化率は低いほうですが、まだまだ子育てに悩むお父さんお母さんは多い。行政だけではできないことと市民のやりたいことの違いを乗り越え、取り組んでいきたいと思います。

(林)事前にいただいた質問です。交流人口が多い中で、これから市民協働を進めるにあたって、山崎さんからご意見をお願いします。

(山崎)昼間人口と夜間人口の話でもありますが、よくいうのは定住人口と交流人口の話があります。府中市はまだ定住人口が増えているのかもしれませんが、訪れてくれる方や働きにきてくれる方々との協働を進めると同時に、この言葉はあるか分かりませんが、「活動人口」を増やしていくことが大事だといつも思っています。定住しているが、まちのために何かやるという人が少なくなったのが20世紀です。それより以前はまちのために働くことは当たり前で、自分の「稼ぎの時間」と「勤めの時間」をうまく切り分けていました。今は、勤めは税金という形で払っているからと、行政に全て任せています。自分の稼ぎのほかに勤めをしようとする人のことを「活動人口」と呼ぶならば、定住人口と交流人口をつなぐものとして、活動人口の比率を高めていかなければならないと思います。

(林) ボランティアはボランティア、働く人は働くというように、現在は分業されてしまっています。それを再構築していくのが、これからの協働のあり方ではないでしょうか。

(市長) 働きに来るだけの人や、夜帰ってきて寝るだけという人たちに、府中の魅力を感じてもらいたいです。多様な方がいらっしゃるので、その力を結集できればというのが、私の願いであり、理想です。

(林) ちなみに、会場にいらっしゃる方で、府中市以外から来られた方はいらっしゃいますか？

(該当者、挙手)

(林) 結構いらっしゃいますね。こうした方々から多様な協働につながっていくのだと思います。続きまして、ほかの方からのご質問に移らせていただきます。

・ 府中市の子育てについて

(林) 府中市は子育てしている若い世代が多いですが、こうした方が協働に入っていけるような下地づくりについて、高野市長お願いします。

(市長) 男性であれ、女性であれ、ほとんどはお母さんだと思いますが、買物をしながら子どもを追いかけたり、悩みながら生活をしているお母さんの姿をみることが多いです。保育園の待機児童の問題もありますが、子育ては子どもを預けるだけではありません。同じ悩みをもつ方々が集まれないかと思っています。昨日、双子の子どもをもつイクメンのお父さんの話を聞きました。「思い切って1年間の育児休業をとりましたが、周りに同じ悩みをもつ人がいない」と言っていました。子育ても、協働の一つの大きなテーマになるのではないかと思います。

(林) 今のお話について、山崎さん、お願いします。

(山崎) 今まで子育ては地域でやってきました。時には他人の子どもも叱り、面倒をみていましたが、今は成り立っていません。個人のまわりには誰がいるのか、子どもや高齢者を見守るのは誰か、ということが大事になると思います。すべてを自治会に任せるには負担が大きいため、それとは違うテーマ型のコミュニティが大事になります。人の繋がりやきっかけをどのように生み出すのが大事になると思います。

・ 府中市の協働の進め方

(林) 今のお話にもありましたが、高野市長はこれからどのような協働を作っていきたいとお考えですか。

(市長) 行政の本音としては、ここに市民の力を貸してほしい！というところがあります。しかし、市民にとってそれはやりたいことと必ずしもイコールではありません。だからこそ、行政はメニューをどのように作るか、どれだけバラエティを広げるかを目標にするべきだと思います。現在、府中駅南口再開発事業を行っており、そこに市民協働を展開できるような施設を作る予定です。そこで、具

体的な提案を市民のみなさんからもいただきたいと考えています。

・高齢者の力と協働について

(林)事前にいただいているご質問ですが、府中市には元気過ぎるお年寄りがたくさんいますが、そのエネルギーをどう協働に生かしていけばよいでしょうか？

(山崎)全然悩みじゃないですよ！すごくいいことだと思います。我々が関わったものだと、大阪府に公園を作るという事業がありました。行政は入口だけ作り、他は公園を作るチームに任せました。元気過ぎる高齢者に集ってもらい、切ってよい木と悪い木の講習会を受けながら1年間かけてチームにしていきました。今では180人の人が木を切り、子どもたちの遊び場を作っています。シニアの方の活躍できる舞台を適材適所作っていければ、いきいきと活躍してくれるのではないのでしょうか。

(林)高野市長、いかがでしょうか。

(市長)少し話が変わりますが、去年、歩こう会の会合に参加しました。その中の1人で、70歳くらいの男性が声を掛けてきました。企業の最前線で活躍していましたが、定年を迎え、名刺もなくやることもなく、家にこもっていたそうです。ですが、歩こう会に参加するようになってからは、友達ができて、ボランティアもやっているそうです。

(山崎)男性はそういう方が多いですね。女性はすぐ集まりますが、ワークショップをしても、男性は昼ごはんを1人で食べたりしています。そういうものを取り払って、変えていった方が良くと思います。

・お祭りと自治会・町内会について

(林)府中はお祭りが多いですね、高野市長、東京一といっても過言ではないのではないのでしょうか。

(市長)府中には大国魂神社がありますが、そこでのお祭りが盛んです。それと同時に、市内の文化センター11館での地域まつりもあります。その影響か、イベントも多く、子育てしやすいという点で府中市に住みたいという人が多いです。

(林)府中市はコミュニティと自然の中で、協働を進めています。町の中で、昔ながらのものを大切にしながら協働している地域はありますか？

(山崎)少ないと思います。少子化で担ぎ手がないという問題から、お祭りが成立しなくなってるのです。そこから、小学校の統廃合をどうするかという話になり、ガソリンスタンドがなくなり、最後の要の郵便局がなくなると、その町はすかすかになってしまいます。そのため、地域のお祭りが残り、自治会・町内会・老人クラブの残る都市は本当に珍しいと思います。府中の青年会議所が今年のテーマを「まつり」としていて驚きました。人のつながり、熱気、協力など、す

べてを象徴するものとして「まつり」という3文字がある。それは、その地域の財産だと思います。

(市長)確かにお祭りやイベントがありますが、それが多くの地元の方に支えられているかという、少なくなってきました。また、自治会や商店会への加入率も少しずつ減少しているのが現状です。新しいことばかりがいいというわけではありませんが、新しいメニューを追加することによって市民の方の絆が強まってほしいというのが願いです。

(山崎)全国的な傾向ですと、自治会の加入率は6割をきっているため、半分の人が地域のことを聞いていないという状態になるわけです。そのため、自治会以外のコミュニティ協議会などで地域のことを決めていこうという流れになっています。自治会だけが地域の組織ではないと思ったほうがよいのではないのでしょうか。違う組織があってもよい、いざとなれば協力するようしなやかさがあってもよいのではないのでしょうか。

・学校との協働について

(林)少しテーマを変えさせていただきます。府中市と学校と市民との協働について、高野市長、ご意見をお願いします。

(市長)生徒、ご両親、そして教員のみなさまには日頃から協働にご参加いただいております。感謝しております。しかし、災害発生時や高齢者が増えていく中で、中学生以上の生徒を対象に、市との連携の中で新しいものを作り出していただければと思っていますし、お願いしたい部分もございます。

(林)学校と地域の協働について、山崎さんをお願いします。

(山崎)学生はかなり大きな力を持っています。中立的な立場と、お金儲けではないオーラを持っています。学生が自ら意識して、まちのためのことをずばり言うことが求められています。思い切って発言してほしいです。小・中・高校で、とにかく地域に出て学校で学べないこと、例えば地域のおっちゃんから生き方を学ぶべきだと思います。そこから興味のあることを見つけ、目標に向かって進んでいくのだと思います。

(林)会場に、高校生や大学生の方はいらっしゃいますか？

(該当者、挙手)

(林)高野市長、来ていただいた学生のみなさんにメッセージをお願いします。

(市長)今日は本当にありがとうございます。高校生や大学生がこの場にきてくれるだけで非常にうれしく思いますし、中立的な立場でどのように思われているか、後でこっそり教えてください。

(林)お時間も迫ってまいりましたので、最後にコミュニティの中での家族、まちの幸せについて、本日の感想とともにお願いします。

(市長)人は誰しも、幸せになりたいと思い日々暮らしています。しかし、何が

幸せなのか、それぞれの尺度は異なります。その中で、一緒に暮らしている家族とそれを取り巻くまちにおいて、いかに人と触れ合い語らうかが、まちの幸福につながると思います。

また、海士町では名刺を市民協働で作っていると聞きました。これこそ、市民の方が持つまちのイメージであり、こういう名刺を私もほしいと思いました。市民の方が主体的にまちづくりに参加する、これが府中のまちの幸福論だと思います。

(山崎) studio-L の L は Life という意味です。「Life (生活) こそが重要である」と言ったのが、19世紀の美術批評家ジョン・ラスキンです。どういう意味かというと、「もっとも豊かな人生を過ごす人はどんな人?」と聞かれたときに、「その人が自分の人生で持てるもの、あるいはその人の人格全てを使って自分以外の人に+(プラス)の影響を与え続けることができた人の人生は豊かである」と言いました。そして、「もっとも豊かな国はどのような国?」と聞かれたとき、「もっとも豊かな人生を過ごすことができる人を、たくさん養うことができる国」と言っています。府中市がもっとも豊かな市になる場合、その市民が自分の持っているものや人格により、それ以外の人たちに良い影響を与えられる人たちが一人でも多い市になれば、間違いなく全国で一番豊かで幸せな市だといえると思います。人生の豊かさは、何を手に入れたかではなく、手に入れたものをどう使ったかが大事になってくるので、市民協働の時代に、自分が手に入れたものをどう使ったか、誰のために使っていくのかを1人ずつ意識していくと、「府中市ええやん」「ええ人いっぱいおるやん」と思われるような市になると思います。こういう幸福論が展開されるようなまちになれば、私も、もう一度府中市を訪れて幸せな気分になりたいです。

(林)ありがとうございます。府中市制施行60周年を迎えて次のステップに進む中で、市民協働の推進において、より具体的なアイデアを市民のみなさんと掛け合わせていながら、一歩ずつ作り上げていけるように、また山崎さんからアドバイスをいただければと思います。

山崎さん、高野市長、本日は誠にありがとうございました。

以上